

池田文書の研究 (二十五)

入沢達吉の書簡について

池田文書研究会

一、入沢達吉の略歴

達吉は、始め竜彦のち達吉。号は雲荘、また雲人とも。慶応元年(一八六五)一月五日越後南蒲原郡今町に生まる。蘭方医の父恭平死去により上京(明治九年)、叔父池田謙齋宅に寄留し、明治十年十二月東京大学医学部予備四級乙に入学。

十三年十二月東京大学医学部予科三等入学、十六年十二月東京大学医学部本科五等入学。明治二十二年一月本科卒業後ベルツの助手となる。二十三年三月ドイツに自費留学。ストラスブルク大学・ベルリン大学で内科・神経科・病理学・生理化学などを学び、二十七年帰朝。一時、宮内省待医局に勤務するが退職し、日本橋に診療所を開く。二十八年医科大学助教授、三十年東京市養育院医長、市立駒込病院医長、本所病院医長となる。三十二年医学博士、三十四年東京帝国大学教授となり、内科を担当。三十五年入沢内科新設。三十八年永楽病院院長、四十二年内科学会会頭となる。

大正九年宮内省御用掛を命ぜられ、大正天皇を拝診。十年

東京帝国大学付属病院長、四月医学部長となる。結核学会会頭、中央衛生会委員、十三年侍医頭、東京医学会会頭を歴任。十四年停年退官。昭和二年勲二等・正三位。九年日本医学会会頭となる。十三年十一月八日没、享年七十四歳。

大正天皇の侍医として世に知られ、また門下からは次代を担う臨床医家を多数輩出し、医学教育家としても名が高い。

明治・大正・昭和三代にわたる著明な内科医として働くかたわら日支文化交流事業(同仁会病院の設立)、日独文化交流事業(日独協会理事長)に尽くす。

(参考文献「楓菰集」・「日本医事新報」No. 八九六、二〇八四・「入沢達吉先生年譜」入沢内科同窓会刊)

二、達吉の書簡

達吉から叔父謙齋及びその家族宛てた書簡は合計三十七通で殆どが身内としての通信でありプライベートな色彩の濃いものが多い。しかし強いて分けるとすれば次の三期に分けられる。

A、留学期まで(留学先からのものも含めて)

(明治十年〜同二十七年) 十一通

B、帰朝後、謙齋死亡まで

(明治二十七年〜大正七年) 十四通

C、その他、謙齋長男(秀男)、同嫁(房子)、同孫(真次郎)宛てたもの・その他

(大正七年〜昭和十三年) 十二通

入沢達吉書簡一覧

書簡番号	発信年月日()内推定	発信者	受信者	備考
(A) 留学期まで(明治10~27年)				
1 380	明治(9)年9月21日	達吉(代)	池田叔父	達吉上京通知
2 393	明治13年7月24日(封筒消印)	達吉	池田伯父	達吉帰省安着
3 394	明治(15)年7月29日	達吉	池田御伯父	虎列刺流行
4 383	明治16年2月13日	達吉	御母上	池田家待遇改善要求
5 391	明治16年8月1日(封筒消印)	達吉	池田謙斎	達吉伊香保病気静養
6 417	明治17年8月2日	達吉	池田大叔父	達吉病状報告
7 410	明治(17)年8月31日	達吉	池田御叔父	達吉上京通知
8 395	明治 年7月24日	達吉	欠	達吉日光滞在
9 1240	明治(23)年1月30日	達吉	御叔父	願書(留学か)提出
10 385	明治24年11月14日	達吉	池田御叔父	ストラスブルヒより
11 396	明治25年2月7日	達吉	池田御叔父	ストラスブルヒより
(B) 帰朝後、謙斎死亡まで(明治27年~大正7年)				
12 386	明治(27~28)年8月10日	達吉	池田御叔父	開業(?)の近況報告
13 1242	明治(32~33)年6月13日	達吉	池田御叔父	充四郎幼年学校合格
14 402	明治(34)年5月16日	達吉	池田御叔父	達吉教授就任
15 381	明治(35)年12月1日	達吉	池田御叔父	秀男縁談整う
16 387	明治(35)年3月29日	達吉	池田御叔父	別紙捺印
17 390	明治36年11月2日(封筒消印)	達吉	池田御叔父	金助町家屋購入
18 379	明治 年12月7日	達吉	池田御叔父	婚儀(氏名不詳)の件
19 350	年 1月29日	達吉	池田	患者診察依頼
20 377	年 2月12日	達者	池田御叔父	患者診察報告
21 382	年 1月26日	達吉	池田御叔父	親戚患者入院の件
22 378	年 2月15日	達吉	池田御叔父	親戚患者診察報告
23 389	年 2月16日	達吉	池田御叔父	(378の翌日か)
24 418	明治(39)年10月13日	達吉	池田御叔父	ベルツ・スクリバ銅像掘金
25 1239	年 9月21日	達吉・節子	池田御叔父	法会出席通知
(C) 謙斎の家族宛、その他(大正7年~昭和13年)				
26 416	(大正)7年4月19日	達吉	池田秀男	静養の指示
27 411	(昭和)10年4月25日	達吉	池田真次郎	シーボルト展
28 1243	昭和11年12月9日	達吉	遠藤参夫	池田家財産管理依頼紹介状
29 413	(昭和) 年 1月22日	達吉	池田房子	縁談(真次郎か)
30 388	(昭和)12年2月25日	達吉	池田房子	謙斎遺品
31 1245	(昭和)12年6月8日	達吉	池田房子	縁談(真次郎か)
32 414	(昭和)12年7月29日	達吉	池田房子	縁談(真次郎)
33 1241	(昭和)12年8月12日	達吉	池田房子	明治天皇御下賜品借用依頼
34 1244	(昭和)12年8月21日	達吉	池田真次郎	葬儀(房子)挨拶
35 384	(昭和)12年11月11日	達吉	池田真次郎	謙斎学位論文借用願
36 412	昭和13年2月11日	達吉	池田真次郎	謙斎遺品整理経過報告
37 415	(昭和)13年3月16日	達吉	池田真次郎・孝子	芝居に招待

肉親への文通という書簡の性質上、直接医学界に関係する記事は少ないが、別の意味で興味深いものもある。即ちAの中には、達吉の母唯子に宛てた書簡（明治十六年）があり大医学科時代の寄留先である池田家の待遇について書き送ったもの、またストラスブル大学の生活を叔父に知らせたものなどは、明治時代の書生生活の内状、留学事情が雄弁に語られている。Bには患者の病状報告や礼状が多く、Cには縁談や謙斎の遺品についての指示などがある。

（斎藤美栄子）

1 明治（九）年九月二十一日

三八〇 入沢達吉（代筆） 池田謙斎

一書相呈仕候、然ハ日々増冷気ニ相成り候得共、先以高堂皆々様、御揃弥御壯健被遊御起居、奉大賀候、次ニ私家一統無事消光御座候間、乍憚御休胸可被下候、將御老父様之御荷物も随ニ当着仕候間、御安心被下度奉存候、私荷物も当月廿三日差出し候間、着仕候ハ、御請取り置被下度、奉願上候、発足ノ義ハ、来月着入と預メ期定仕候、着仕候上は、万端御厄介様ニ可相成と奉存候、何れ着之上、万々奉申上候、右時候御見舞旁申上度、如斯御座候、恐々拝首

九月廿一日 入沢達吉

代

池田御叔父様

尚々、時候柄折角御厭い自愛御専一方奉存候、乍末筆御隠居様初皆々様、宜敷御伝声、奉希上候也

（斎藤）

（二） 達吉初上京の明治九年十月の直前か。

2 明治十三年七月二十四日

三九三 入沢達吉 池田謙斎

（封筒裏）

東京駿河台北甲賀町九番地 池田謙斎様玉机下 越後下今町

入沢達吉拜

（封筒裏）

七月廿四日投函（消印、今町七・二五 東京一三・七・二八）

別紙御序之節、浅岡様へ御届け被下度候

拜啓陳は小生義過日六日町より鄙翰拝呈仕候通り、当日同駅より川船にて長岡迄下り、翌廿一日当地へ安着仕候間、此段乍慮外御休意被下度候、且帰省之節は種々御土産物頂戴仕、誠に難有奉存候、母よりも宜敷申旨候、先は御礼迄、早々不具

七月廿四日 入沢達吉拜

池田伯父様

玉几下

尚々乍末筆御隠居様伯母様始メ皆々様へ宜敷御鳳声被下度奉懇願候也

(一) 浅岡……浅岡清、達吉の母・唯の弟。横浜の浅岡清且の養嗣子となる。

(斎藤)

3 明治(十五)年七月二十九日

三九四 入沢達吉 池田謙斎

時下酷暑之候、益御清榮奉賀候、陳は小生、帰宅後早速展墓、旁新瀉へ出港致居、兩三日前、稍ク帰宅仕候、扱、去ル廿四日御認之御書状、昨日到着、正ニ拝見難有奉感佩候、承レバ御地には、虎列刺病大流行之由、皆々様御養生專一に奉祈候、此度ハ又、一ノ木戸御伯母様御逝去被遊候段、御愁歎之至りと奉愚察候、乍末筆御老母様、御伯母様始メ皆々様へ、宜しく御伝言有之度、偏ニ奉懇願候、早々不宣

七月廿九日 入沢達吉

拜

池田御伯父様

研右

再申上候、一ノ木戸お八重様御事、遂に御果被成、如何様御愁傷ト奉存候、然し御母上様御事ハ、最早御あきらめ被遊候故、別条御力をとしも無之、御案じ被下間敷候、扱又、敏事、色々頂戴物致し候との事、同人より悦ビ遣し、毎度御心付被下、かへすく喜ビ居候、味噌漬ハ余り日数相掛り、味ヒノ程如何と案じ申居候、時節がら御養生專一に奉祈候、恐入り候へ共、御隠居様御始メ皆々様へ、万々御礼御伝へ被下度奉願上候

(斎藤)

(一) 虎列刺病大流行……明治一〇、一一、一五、二三、二八年に全国に流行。

(二) 一ノ木戸御伯母様……行田八重、明治十五年七月十六日死亡(達吉の予科二等の時)。

(三) 伯母八重とコレラ流行の記事により明治十五年と推定できらる。

(四) 敏……謙斎の長女・敏子。

4 明治十六年二月十三日

三八三 入沢達吉 入沢唯子

本人ニ此状御無用

先月廿五日、御手紙正ニ拝見、難有奉存候、陳は新瀉竹山様、

同祐彦様、去月廿八日御ちやく候、当時ハ御兩人共、浅岡様に御出被成候、祐彦様ハ今月はじめより、私共さうだん之上、独乙学校ト申す処へ通学被成候、然し是は近キ内ニ入ジク致すつもりにて御座候、私下宿之事、其後度々新瀉叔父様へ御さうだん申し、池田様へ御ねがひ申候へ共、御ゆるしなく、誠に困り入申候、此節ハ池田に居りても食客生ト一シヨニ飯ヲたべ候故、三度々々ノたべものひじやうにあしく、今までよきものをたべし私には誠になんぎ、且ツ朝ハ日々八時よりけいこ相始まり申候故、七時前におき申候へ共、ごせんハともできん不申候故、毎朝々々ひやめしの茶づけにたくはんにてごぜんをたべ、学校へまえり候へ共、大ていまへあさのやうに時間におくれ申候、右ハおちやのわくまでまち居、又学校迄ハ池田よりいそいで三十分ハ相かゝり申候故ニ御座候、池田へまいりてより、汁ヲたべしハ日曜ト休日之外には無レ之候、昔ノ事ヲ考へ候へバ、よろしく候へ共、今時私共学校之生徒にて、かくのごときものをたべル人ハ無之、且ツあさからばん迄あたまをつかふ人が、トモ粗食致し居りてハ、体がつゞき不申候、池田にてハひるハ、にしめかさかななり、然しこれも、私ハ、日々たくはんばかりなり、其外第一こまるハおらず、夕ハ、日々たくはんばかりなり、其外第一こまるハ、内がさわがしく候故、迎モしんみりとかがひもの等ハできず、塾生ハ不べんきやう、よるハことにさわがしく、実ニ困り申候、其他池田にてハ奥ハ「ランブ」なれ共、塾ハ一切ランブを禁じおかれ候故、細かき洋書ハ夜ハ迎モよめず、

困り入り申候、右之事ハ、けしうそでなく、しんじつ之事にて御座候、敏子に御きゝあわせにては相分り申候、右之事、竹山様へさうだん致し候処、同人ハせうち被成候やうすなれ共、たべものゝ事などハ、池田様へハ申上にくき、やうす、又右之事、池田様ハたゞわたくしヲ御うたがひ被成居候故、御ゆるしなし、其御恩ハ誠ニ難有御座候へ共、此マゝにてハ迎モしけんにあがるあてハ無之、ことに五月モおい／＼ちかより、又十一月しけんには、六十人の内三十人位シカ本科ニ上せず、実ニ困り申候、右之事等も池田様並ニ竹山様へ御はなし申候へ共、私のべんきやう等には少しも御しんばいなきやうす、そのわけハ、若シ私不行行にても致し申候バ、池田様等おせわ被成下候かほにかゝり申候へ共、不べんきやう等にて、らくだい等、いたすトモ、私ノつみにばかり、相成候わけと、すいさつ、致申候、何分此まゝにてハ、迎モながくつゞき不申、事のきまらぬ内ハべんきやうモ手につかず困り入申候、まださがが六年もあり、又今年ハ中にもむつかしき年にて御座候、しかし、おりをみて、なを一とおり、よく／＼、おねがひ申、つもりにて御座候、しかし池田へまへりし以来モ、一時間モ欠席せず、できるだけハ、つとめ居申候間、御安心被下度候、当地今月二日、七八寸モ雪つもり申候、又、八日には当地四十年以来ノ大雪ト申す事にて、二尺余もつもり申候、此日にハ大風雪にて候へ共、私ハ学校へまへり候処、遠方よりまへりしハ私一人にて、あとハ舎に居りし人十人ばかりなりし故、当日ハやすみに相居候、如此大雪ハまことニ

めづらしく御座候、御地ハ雪すくなき、やうす、如何に御座候や、御やうじやう専一に奉折候、当地ハかんあきのさむさかなり、ひどく御座候、何事も後便にゆづり、早々不一

十六年二月十三日夜

東京にて 達吉拜

越後今町にて 御母上様

平介此度まへり申候

○加藤祐善子ちやうへいけんさにて、本月三日発足、下野、信州ヨリ越後へモまへる由にて、先日いとまごいにこられ候

(斎藤)

- (一) 竹山……母の弟・竹山屯。
- (二) 竹山祐彦……竹山屯の兄・亨の二男。
- (三) 浅岡……浅岡清。
- (四) 独乙学校……本郷台町の私立独乙学校。
- (五) 新潟叔父様……竹山屯。
- (六) 敏子……謙齋長女・大野敏子。
- (七) 越後今町……明治二年〜同十九年迄在住。
- (八) 平介……未詳。
- (九) 加藤祐善……未詳。

5 明治十六年八月一日

三九一 入沢達吉 池田謙齋

(封筒裏)

東京神田駿河台北甲賀町九番地 池田謙齋様

口信書

上野西群馬郡伊香保温泉場木暮八郎方 入沢達吉

(封筒裏)

第八月一日投函 (消印)、上野・群馬・伊香保・八、一、東京・

ヲ・一六・八・三)

酷暑之節、益御機嫌克被為入、奉賀候、陳は、小生一昨廿日午前六時汽車乗込み、同八時廿五分熊谷へ着、同処より大隈氏雇之馬車にて、午後二時高崎へ着、夫より人力車にて四時出立、柏木通りより十時半頃当地へ到着仕候間、乍慮外御安意被成下度候、同夜は、大隈氏新家へ一泊仕、昨朝当処へ相移り申候、他は左程にて無之由に御座候へ共、当家は目今、浴客充滿致居申候、渋谷太郎氏昨夜着致され、今朝面会之上、金巴等相頼み申候、日々服薬仕居、便行も従前之如く二回ツツにて御座候、乍末筆、御伯母様始メ皆々様へ、よろしく御鳳声被成下度、奉願候、早々拜具

八月一日午前

(一) 木暮八郎方……伊香保温泉の謙齋の常宿。

(斎藤)

6 明治十七年八月二日

四一七 入沢達吉 池田大叔父

時下酷暑之候、御満堂様益御清栄被為入奉賀候、陳は小子義
掃郷後頭痛于今全快不仕、甚夕困却仕候間、如何手当仕り可
然哉、乍御手数様其療法御洩し被成下度候、尤も書籍等ハ持
參仕候へ共一切説不申、日々数次冷水にて頭を洗ひ且つ時々
下剤を相用ひ申候へ共、快方に不赴候間、恐入候へ共右よろ
しく御願申上候、早々頓首

十七年

八月貳日

入沢達吉

拜

池田大叔父様

吾下

(田中)

7 明治(十七)年八月三十一日

四一〇 入沢達吉 池田御叔父

荷物一包差出置候間、相届き申候はゞ、乍御手数様御預
り置被下度候

拜啓、陳は皆々様益御機嫌被為入奉賀候、次に小生も愈一兩
日中に当地発足、上京之心得にて御座候、頭痛之義も稍ヤ相
薄らき申候と覚候処、先日新瀉表にて瘧ヲ相煩ひ、其後モ少々
風邪之気味にて候へ共、日限切迫にも相成申候ニ付、無抛出
立致候間、孰レ着京之上、又々御厄介様相願申度候、乍末筆
御一同様へ宜しく御鳳声被成下度、奉願候、母よりも万々御
礼申上候、早々頓首

八月廿一日 入沢達吉拜

東京

池田御叔父様

玉案下

(斉藤)

(二) 前簡との関連する内容で、明治十七年か。

8 明治 年七月二十四日

三九五 入沢達吉 (池田謙斎)

拜啓仕候、陳は小生事昨日午前八時四十分発汽車にて御地出
立仕り、午後一時半宇都宮へ着任候処、大雨にて無抛一泊仕
り、本日は晴天にて御座候故、午前六時同処より車相備申候
処、当地方は先月来連日雨天而已打続き候由にて、道路殊之
外破損致し為メニ昨今は馬車モ相休居候位にて、車夫モ一人
にては六ヶ敷と申候へ共、泥中を歩行致し徳次郎駅迄参り同

処より別の後押一人を附け申候処、大沢駅入口辺にて車俄然
 転覆仕候、然し幸ニ怪我モ無之、唯泥に塗れ候迄にて御座候
 間、乍憚御休神成下度候、午後一時より急雨降り、三時半漸
 く当処へ着仕候、僅ニ九里之処にて九時間余モ相費やし、誠
 に困難仕り却て徒歩之方大キニよろしかりしト後悔仕候、小
 子共先づ当分え内爰え滞在仕り、追て中禅寺又ハ湯本へ移転
 可仕心組にて御座候、先は右申上候迄、余は讓後郵草々頓首
 乍末筆皆々様へよろしく御鳳声被成下度奉願候也

七月廿四日夜

下野国都賀郡日光御幸町古橋保平方

入沢達吉拜

(斉藤)

9 明治(二十三)年一月三十日

一二四〇 入沢達吉 池田謙斎

拜啓陳は、昨日は結構なる品物頂戴、難有奉拜謝候、其後直
 ちに学校え参り、三宅学長に相願候処、制規之書式有之候故、
 願書にて差出スベシトノ事に付、早速其手続に依り且ツベル
 ツ、青山両教師之承諾ヲモ経候間、此段御承知被下度候、右
 願書之義は帝国大学評議官會議ニテ、許否議定相成候事に御
 坐候故、不遠何分之御沙汰有之候半ト奉存候、委曲は拝眉之
 節縷々申上度、早々頓首

③ 一月卅日夜

達吉

御叔父様

玉几下

(斉藤)

(一) 願書……達吉の自筆留学の願書か。

(二) 青山……青山胤通、帝国大学医科大学内科学教授、明治三十四年から大正六年まで医科大学長。

(三) 達吉の留学が明治二十三年三月から同二十七年二月までであるから、その直前の明治二十三年一月の書簡か。

10 明治二十四年十一月十四日

三八五 入澤達吉 池田御叔父様

拜啓陳は先月下旬一書敬呈仕候筈、御高覽被成下候事ト奉存
 候、追々寒氣相加申候処、益御清穆被為入奉賀候、扱て井上
 勝之介氏御夫婦愈来月廿日頃帰朝之途ニ被就候趣にて御坐候
 故、此度小生方申上げ、秀男君学資金之義小生え御引渡シ相
 成申候、即ち如別紙金式千〇六拾九麻九十九片が現在金にて
 御座候、此内方洋服之払ヲなし、余ハ秀男君之名前ニテ一昨
 日当地之銀行ニ相預け申候、秀男君「ボン」方参ラシ候節ハ、
 衣服ハ一ト通り丈ケニテ(元来奇麗ノ着物ヲ衣ル事大嫌ヒノ
 由ニテ「ボン」「トーマス」ノ妻毎度小言申居候)候へし故、

当地ニテ夏物二通、夏外套其他作ラセ申候、是レヨリ又々冬物詠へ候都合ニ御坐候、此度方経済ハ都テ独立ニ致シ、即チ一切秀男君自身ニ委セ申候、是レニテモ大丈夫ト鑑定仕候、

○「シワルベ」教授（解剖家）ハ從來ハ日本人ニ懇意ノ人ノ由ニ承居候が、秀男君ニモ非常ニ親切ニ致シ被呉候由にて御座候、来週ニハ夜会ノ催シアル由ニテ、今日秀男君ニ招待状ヲ自身ニテ被渡候由、依テ今日衣服ヲ注文致候事に御坐候。時間ノ都合ニヨリ此期ヨリ既ニ「生理学」ヲモ聴講被致候（ゴ

ルツ氏）ナリ故ニ朝八時ヨリ夜七時迄（午後ハ実地解剖及講義）ノ課業アリ、随分多忙ニテ□□図ヲ書ク事等ハ得意ニテ「ブレパリアル、ユーブング」杯ハ手際頗ル良ク、当時大得意ニテ御坐候、好キナ学科ハイクラデモ勉強致候方なり、先ヅハ此俣デズト参り候へバ実ニ大慶至極ナリ、器械学理学等思想ハ常人ヨリ余程多シ、是レガ充分発達致候へば是レモ亦々頗ル妙ト存候、兎ニ角万有学ニハ中々「インテレッセ」ヲ顕シ候事故御安心被下度候、若シ少シニテモ人ニスグレタル処御坐候へば、其方ニ向ツテ材能ノ発達ヲ促シ候事実ニ得策ト奉存候、「インテレッセ」無キ事は到底充分ニ出来ザル事ト奉存候、秀男解剖、生理、理化学書、及骨格、器械等モ尽ク整頓致シ申候

○「ボン」「トーマス」ノ甥当地ニテ志願兵ヲ勤メ（同姓、医学生）居り候者私共ト同番地ニ住居致居申候、又タ先月方トーマス志ノ三男（法学生）当地ニ修学致居り時々孰レモ来住致居申候

○数日前「ウキルヒヨウ」博士ノ伝記一冊郵便ニテ拜呈仕候筈、御落手被成下候事ト奉存候、猶時事新報ニモ先日一寸認め遣シ申候筈

○次郎君中学云々之件先日承り申候が、濱尾氏、木下氏杯ノ演説ヲ新聞紙ニ拜見仕候ニ、今後ハ専ラ尋常中学校ノ高等中学校ニ生徒ヲ入れ候様ニ致シ候モノ、如ク候故、次郎君も東京府尋常中学校え御入学可然奉存候、御賢慮ハ如何ニ被為在候哉、

○井上氏ハ出立前公私多忙故、詳細ナル計算書ヲ送ラズ云々ト小生ニ申遣ハサレ候、又タ以前ハ存ゼス候へ共、小生が受取り候ヨリハ郵便為替料等ハ其都度井上氏が支弁セラレ候モノト相見エ、計算中ニハ記入無御坐候間、御含みに迄右申上候、

○当地ハ教師ハ皆ナヨロシク御坐候へ共、外科丈ケハ余り感心不仕候、右リユツケ氏ハ学者ノ由ニ御坐候へ共、手術ハ工ナラズ、講演も拙ノ様ニ見受ケ申候、

○小生来年夏学期ハ如何致ス可キヤ未だ「シワンケン」致居申候、此頃ハ時々「フロインドノ婦」人科ヲ聴キニ参り申候、○其後御容体ハ如何被為入候哉、奉伺候、折角御養生専一ニ奉祈上候、

○「日本の筆」乏シク相成、兩人共不自由仕居候間、若シ辛便モ候はゞ真書。状書キ等数十本御送附奉願上候、原田氏ハ最早疾クニ出立被致候事ト奉存候、先ハ右用事而已申上余讓後便、草々頓首、乍末筆皆々様えよろしく御鳳声奉願上候

明治廿四年

十一月十四日夜十二時半

日本東京

池田御叔父様

ストラスブルヒ

入澤達吉

○日本大地震ノ事電報ニテ承知驚入申候、東京ハ無事ノ事ト奉存候

(田中)

- (一) 井上勝之介……井上馨の養子。
- (二) 秀男……謙斎の長男、ドイツ留学中。
- (三) プレパリアル、ユープリング……Präparier-Übung(独) 標本作製。
- (四) 万有学……物理学。
- (五) ウキルヒヨウ……Rudolf Virchow (一八二一〜一九二〇)、ベルリン大学総長。白血病の研究で著名。
- (六) 次郎……謙斎の次男。安部信順に養子。
- (七) シワンケン……Schwanken (独) 動揺する。
- (八) 日本大地震……濃尾地震。明治二十四年十月二十八日発生、M七・九。